第21号
「PMFを応援する会」会報
協　奏
2019年10月7日

30回目の夏がめぐって・・・

記念ファンファーレ&竹津宜男氏への想い

津　田　　元（作曲家）

PMFがついに30回を迎えた。奇しくもPMF誕生が平成元年（※開催は翌年）、30回目の今年が令和元年と、まさにPMFは平成を丸ごと駆け抜けてきた。そして30回記念オリジナルファンファーレ公募に拙作が採用される光栄にも浴した。この作品は正確には「オリジナル」ではない。バーンスタインが遺した「ニドム賛歌」（貴会各位はよくご存じ）の一節をモティーフに使った。そのニドムとバーンスタインを繋いだのが誰あろう貴会初代会長、故・竹津宜男氏である。

私は1990年10月に設置されたPMF準備室（組織委員会事務局の前身）時代から1995年3月まで、PMF組織委草創期に事務局職員として竹津氏の下で貴重な時間を過ごさせていただいた。大変お世話になり感謝の言葉もない。今なお在りし日のお姿がありありと脳裏に浮かぶ。当時の事務局幹部四人は全員が姓の頭文字にTが付くということで「最強4T‘s」と自称していたようだが、私はここには数えられていない。私もTなのだが、少々淋しい（笑）。尤も数に入れてもらえる程の戦力ではなかったので仕方がない。

四人の幹部のうち唯一、民間（札響）出身で加わられた竹津氏は東京からやってきた業界スタッフと行政（札幌市）との仲介・調整役を担うお立場で多大なご苦労があったと思う。私自身も同じ音楽人として立ち位置に戸惑うことが多かった。そんな時、氏のさりげないフォローで救われたことが何度あっただろうか。

今回のファンファーレの冒頭にバーンスタインのモティーフがホルンで提示されるが、思えば竹津氏もホルン奏者であった。不思議な偶然を感じる。この作品は許されるならば敬意をこめて竹津氏に献呈したいと考えている。

1985年に教育大の音楽科を出たもののモラトリアム状態だった私にとって、幸運にも事務局の末席に加わることができたPMFとの出会いは大きかった。第1回オープニング・セレモニーでのバーンスタインの伝説的なスピーチは、まさにその時、野外ステージ横の駐車場整理に駆り出されており、せっかく至近距離に居ながら残念ながら立ち会うことはできなかった。しかしバーンスタインの遺言の一つに「もし自分が音楽家になるべきかどうかと迷ったら、その時点で答えはNoだ。なぜならば自分が疑問に思ったから。自分自身が音楽家になりたいから音楽家なのだ。誰もそれを止めることはできない。」という（正確ではないがおよそこのような）禅問答のような言葉があった。この言葉は青年時代からずっと私の心の支えになってきた。

ファンファーレ隊と津田氏（中央）
写真提供：（公財）PMF組織委員会

1995年4月にPMFからKitaraの準備室に異動となり2000年3月までKitaraに勤務し、その後札幌を離れた。現在は認知症が始まった母を見守りながら千葉・船橋で生活している。正直音楽どころではない日々なのだが、それでもまだ自分の音楽を探し求める心は失っていないつもりだ。

お世話になったPMFとKitaraの二つの古巣には、いつかささやかでも「自分の音楽」で恩返しをしたいと希ってきた。Kitaraには開演チャイムを遺すことができた。だがPMFにはその機会がなかなか訪れなかった。しかしそれも今回のファンファーレ採用で悲願が叶った。30年の歳月はかかったが、もうこれで思い残すことはない。

北の都・札幌に1990年代突如出現したPMFとKitara。この刺激的な空前絶後の10年を、二つの現場に没入することを許された経験は、今、私の人生にかけがえのない財産となっている。

PMFよ、ありがとう！

そして30th Anniversaryおめでとう！　いつまでも！

PMF30th Anniversary特集

1990年にタイムスリップ！ あの頃の私・・・そして今につながる思い！

PMFへの断章・2 応援する会の原風景

宮部 光幸　　PMFを応援する会フェロー(建築家)

ある夏の午後、テレビ塔の前を歩いていると、マエストロ、バーンスタインのスタッフ一行に会った。ホテル・ニドムでの投宿打合せで顔馴染みのハリー・クラウト(注1)に挨拶すると、今夜の演奏会に来るかと問う。チケットを持っていないと応えると、その場でくれた。定刻に着席。札幌市民会館は空調老朽化で騒音が酷い。苦肉の策で演奏中は運転を止めることにしていたので無音。やがてマエストロが現れオーケストラ最前列中央に陣取った。真っ赤なストールが白黒の団員の中でひときわ目立つ。指揮術を教授するのが本日の目的。先ずはマリン・オルソップの指揮。女性の指揮者が珍しい頃だった。3人目、佐渡裕。曲目はチャイコのフランチェスカ・ダ・リミニ。やがて曲の終盤、大柄な佐渡のタクトが螺旋状に上昇し、下降する。オーケストラは操られて上昇し、下降する。激しい曲の展開、佐渡の熱演。終わって汗だくの佐渡に、マエストロは満面の笑みで応えた。1990年第一回ＰＭＦオーケストラ初演の事。後に竹津夫人にこのことを話すと『佐渡さんはあれからブンブン丸というあだ名がついたのよ』と言う

そして、マエストロの逝去

板垣市長のマエストロの葬儀での追悼の辞に、ＰＭＦの継続と音楽専用ホールの建設の表明があり、後の国内6社の設計コンペティション。私達ドーコン(注2)案が1席を得、1994年竣工。PMFはその会場を得た

2014年初夏、北海道音楽とＰＭＦの生みの親、竹津宜男先生が逝去した

1958年の札幌市民会館の柿落し公演で初めて来札した折、先生の目に映った大通公園は『生い茂る樹々の間に控訴院も道庁赤レンガも、そこら中の美しい建物が一望できる夢の街だった』と謂う。この第一印象に支えられたのか、美しい北海道の市町村の総てに、札響を届けることが1961年の創設参加以降の先生の使命となった。そして夢は世界へ広がりPMFとなった。

1989年春の天安門事件直後の札幌誘致に、『今後、何かと手伝うよう』にと私に言った先生の情熱滾る眼を忘れない

注1ハリークラウト:バーンスタインのマネージャー
注2ドーコン:札幌市に本社を置く総合建設コンサルタント会社

PMFへの願い　徳永 純子

PMFボランティア「ハーモニー」
PMFを応援する会　運営委員

1976年、ニューヨークフィルを率いて、颯爽と指揮する若いバーンシュタインをウィーンで見たのが、初めての出会いでした。その頃はまだ彼があの有名なミュージカル ウェストサイドストーリーの作者だという事も知らなかった私でしたが、指揮台の上でキレよくタクトを振る姿に魅了されたのです。

札幌でそのバーンシュタインが始める　教育音楽祭 PMFのボランティア募集を知って、すぐに応募しました。以来30年この素晴らしい音楽祭を支えるのに少しでも役に立ちたいとの思いからつづけてきました。

今年は、13倍にもなったというオーディションを経て、世界中から集まってくるアカデミー生は、見事にプロ根性に支えられていてどんな難曲でもすぐに弾きこなすのを見て、初期の頃の、疲れ、挫折し、なんとか仲間について行こうという姿が、懐かしい位です。

大スポンサーが離れてしまうという危機も、なんとか乗り越えて30年を迎えられたのに、数々の紆余曲折を想いながら、嬉しい気持と、よくぞここまでとの安堵感が抑えられません。

世界的に有名な指揮者の指導に加え、ウィーン、ベルリン、アメリカからの著名な首席奏者の教授陣のセクションごとの指導という札幌でしか巡り逢えない内容を持つ貴重な音楽祭を、これからも力を合わせてしっかりと支え、続けて行って欲しいと願っています。

30年前のPMFと私　川本 伸治

(株)ワンダーシティ　執行役員

留学中に何度も訪れたタングルウッド音楽祭。ボストン市内から 車で４時間。友達数名と交替で運転して行ったことを思い出します。卒業後日本に帰国し、いくつかのオーケストラにエキストラで演奏 していた頃、駅の売店でBernsteinの文字が目に留まり買った英字新聞。そこには札幌で音楽祭が始まるという記事が。読み続けると、タングルウッド音楽祭をモデルにした教育音楽祭で、レジデント・オーケストラはロンドン交響楽団、費用は全て音楽祭持ちで、年令は29歳まで。その頃、日本のオーケストラ奏者でいる環境に 少しずつ疲れ始めていたので、私の胸は期待で躍りました。帰国 して数年経っていましたが、貪欲に音楽だけに浸れていた留学時 の記憶が私を札幌へ駆り立てました。

そして1990年6月。第一回目 のPMFが始まり初めて芸術の森に行った時の感動、緑に囲まれた 自然の中での音楽漬けの毎日、午後から始まったリハーサルが 午前零時まで続いた日々。全てはバーンスタインと共にあった至福の時間でした。目には見えないフォース(Force)のような触手がバーンスタインから私達PMFオーケストラ全員に伸びていて、音楽という栄養を充分に与えてもらえたから、市民会館であの演奏ができたのだと思います。

この本番用に黒いネクタイをオーケストラみんなに買ってくれたバーンスタイン。30年経った今でも色褪せないまま、クロゼットに掛かっています。

PMF2019を終えて

（公財）PMF組織委員会事務局長　知野　学

1990年にレナード・バーンスタインが札幌にPMFを創設してから今年30回目の節目を迎えたPMF2019。振り返ると、まさに30回の「集大成」と呼べる内容であったと感じております。中でも特筆すべきは、7月20日と21日の2日間にわたって開催された「PMFプレミアム・コンサート」でしょう。PMFの創成期を支えた第3代芸術監督クリストフ・エッシェンバッハ氏が約460名の合唱団と126名から成る大編成オーケストラを導いたマーラーの８番は圧倒的な迫力で、終演後の拍手が20分以上鳴り止まないなど、多くのお客様や音楽評論家の方々からも絶賛をいただく歴史的コンサートとなりました。これは、多くは市民である合唱団の方々が長い時間をかけて練習を積み重ね、PMFオーケストラとの協奏によって素晴らしい音楽をつくりあげ、お互いに感動を分かち合うという、市民参加型PMFのひとつの理想形ではなかったかと考えております。

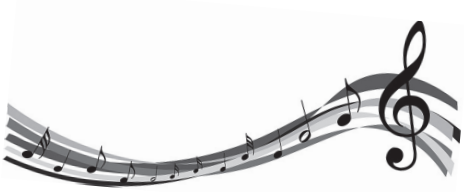
また、8月1日にサントリーホールで開かれた「PMFオーケストラ東京公演」では、上皇・上皇后両陛下にご臨席いただくという栄誉を賜りましたが、公演後のご懇談の席では、両陛下より秋元理事長に対し、若い人たちにチャンスを与える素晴らしい事業であり、ぜひ長く続けてくださいと激励のお言葉をいただいております。このお言葉は、30回目を迎えるPMFが積み重ねてきた歴史の、まさに集大成であり、今後も大いに励みになるものと考えております。

また、今回は、演奏会事業に加え、音楽普及事業が盛んに行われたのもひとつの特色です。例えば30回記念事業のひとつとしてJR札幌駅らと共同で開催した「ストリートピアノin SAPPORO STATION」では、会期中の約2週間で、のべ2000人が駅構内に置かれたピアノを演奏、のべ30万人が観客として演奏を楽しみました。まちに音楽があふれ、市民や来札者が様々な場面で音楽に親しみ、音楽を通じて交流を深めるまちづくりに寄与するというPMFの持つもうひとつの目標を存分に果たすことができたと考えています。

さて、来年のPMF2020では、PMF初となるグランド・オペラの上演に挑みます。北海道初の多面舞台を備えた本格的オペラ上演劇場である札幌文化芸術劇場hitaruにて、モーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』を演奏します。巨匠ゲルギエフがマリインスキー歌劇場の歌い手たちとともにPMFオーケストラをどのようにオペラの世界に導くのか。準備はこれから本格的に行われますが、この公演も間違いなくPMFの歴史に刻まれる舞台となるでしょう。

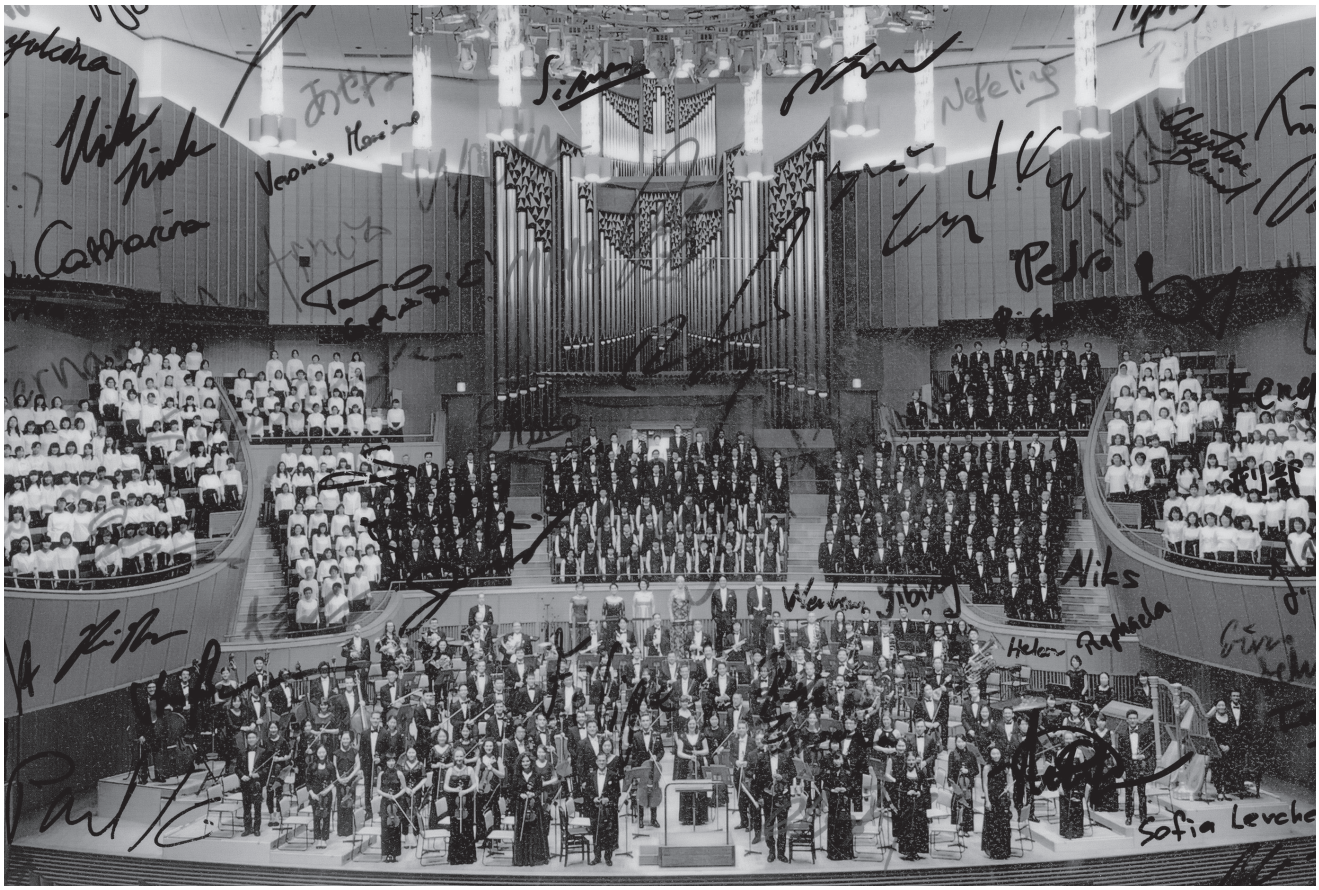
マーラー
「千人の交響曲」　こぼればなし

（合唱参加の匿名さん）



エッシェンバッハは何の前触れもなく現れました。その日は、副指揮者ギャッレット・キーストの最終練習日でしたので、舞台袖からピンク色のセーターを着た老人が入って来たことを誰も気に留めませんでした。数秒後、「エッシェンバッハだ！」「本物だ！」という声が練習場に広がり、すぐに凍り付くような緊張の場となったのでした。しかし、エッシェンバッハは、第２部冒頭の男声合唱では、自らピアノの影に隠れ、恐る恐る顔を出しながら、「こんな風に神秘的に。」と、私達を和ませてくださいました。また、少年少女合唱団の子供たちに対しては、一人前の人間として敬意を持って接し、子供たちも誇らしく笑顔が輝いていたことも印象的でした。また、オケ合わせ初日には、ライナー・キュッヒルさんがコンマスを努めてくださいました。チグハグな私達に、バイオリンで、「この曲はこういう曲ですよ。」と語ってくださいました。心にしみました。更に、至近距離で腕・手首・弓の超絶技法を惜しみなく見せてくださいました。学生団員たちからは感嘆の声が上がり、ｷｭｯﾋﾙさんの真似をしてはしゃぐ若者たちがいました。世界的マエストロの指導を直接受けることが出来たことは、本当に夢のような貴重な経験でした。

アカデミー生のサイン入り写真



PMF2019アカデミー生は、はつらつと、意欲的に、学び、発表して実りある時間を過ごし、それぞれの国に戻りました。私たち「応援する会」も彼らと一緒に過ごした夏を忘れません、ありがとう！

会期中の活動：7/6, 7/9, 7/13, 7/24, 7/28（開催日順）

●7月6日（土）
カフェサロン＃30オープニングで会いましょう

札幌芸術の森 10:00-12:30

オープニング前のひととき、カフェを開いて交流。市民の皆さま、アカデミー生の皆さまお越しくださいましてありがとうございました。

●7月9日（金）
PMFホストシティー・オーケストラ演奏会チケットの提供

次の世代にPMFがつながることを願いU25チケット20枚を組織委員会からいただき、光塩学園、吉田学園、福住小学校、他にお届けしました。PMFやクラッシックコンサートに関心を持つきっかけになる事を願っています。

●7月13日（日）
北工学園留学生（東川町）をピクニックコンサートにご案内

北工学園はバスを仕立て、留学生３８人をピクニックコンサートが開催される芸術の森へ。組織委員会からのご配慮で駐車スペース、公式プログラム、水を準備していただきました。日本語を学ぶ生徒たちは初めてのPMFに大きな感動を得たようでした。

●7月24日（水）
小樽ツアー

今年で３回目となるツアー。当会は小樽に招待くださる協力者とPMF組織委員会との連絡や調整に始まり、案内や参加希望者の受付、抽選、バス搭乗、随行など多岐に渡る活動を行いました。アカデミー生は海を見て歓声をあげ、昼食に舌鼓をうち、ご厚意に触れて休養と鋭気を養いました。

【協力：秋野治郎、小泉美芳、紫藤正行、宮部光幸】
敬称略

9:00 アカデミー生２８人を乗せて宿舎を出発！

●7月28日（日）
テーブルオーナープログラム

アカデミー生を夕食に招待する企画、昨年に引き続き２回目です。その様子をご紹介いたします。
世界から集まって来た若い音楽家たちと出会う機会、食を共にする機会に文化や人柄がより身近に・・・。

① アカデミー生８人、和食ご招待　【パトロン：竹津香苗、鷲見陽子、氏家公子、徳永純子】敬称略

あの日、アカデミー生8人と私たち４人は宿舎で対面、ドキドキの瞬間です。うまくいくかしら…の不安もナンノソノ、タクシー３台に分乗して目的地、京王プラザホテルB１の「あきず」へ。焼き鳥、茶わん蒸し、刺身、寿司…次々に運ばれる料理はもちろん、美しい器にも興味を示す青年たちとの会話は途切れることなく盛り上がりました。日本酒の飲み比べも好評でした。一番評判が良かったのは、北海道、増毛の「国稀」でした。ありがとう！（徳永記）

② アカデミー生５人、うどん懐石ご招待　【パトロン：磯田憲一、協力：三坂桂子】敬称略

Hitaruでのコンサートの興奮冷めやらぬアカデミー生5人を伴い、古民家風の佇まいの「座忘庵」へ。うどんと中国料理の折衷メニューが特徴で、はじめは小鉢の取り合わせが美しい前菜風、和風の盛り付けにみんな歓声を上げる。彼らは日本文化や生活習慣についての知識が豊富で、出された料理をとても喜んで完食してくれた。閉店時間を過ぎても帰りをせかされなかったのは店主のご好意と感謝している。次に会えることを期待しながら、宿舎の前でいつまでも別れを惜しんだ。（三坂記）

③ アカデミー生５人、蕎麦屋ご招待　【パトロン：丹羽祐而、中村和雄、小高令子】敬称略

アカデミー生の方たちと札幌円山の「東家寿楽」での食事会にご一緒させていただきました。アメリカ、スイス、セルビア、オーストラリア在住日本人、香港からの５人は「蕎麦懐石」をとても喜んでくれました。オーディションの応募の時に何度もデモテープを取り直したとか、お父様は札幌出身の方など興味深いお話を聞くことが出来とても楽しい時間を過ごしました。これからも皆さんのご活躍をお祈りしています。（小高記）

④ アカデミー生２０人ご招待　【パトロン：さっぽろ芸術文化研究所】敬称略

アカデミー生20名と札幌の学生や若手アーティスト10名を、18人の皆さんにパトロンとなっていただき招待する「パトロネージュパーティー」の試みを行いました（会場：赤れんがテラス４階 Restaurant MINAMI）。ソーラン節の弦楽三重奏・100号の絵画・アフリカ廃棄物問題のプレゼン・お笑いパフォーマンスなどを交えながら、アカデミー生とニックネームで紹介し合うなど、たくさんの笑いと楽しい会話のある交流ができました。ご協力に感謝申し上げます。（伊藤記）

つ・ぶ・や・き

猛暑日が続いた記憶に残る夏でしたね！普段のアカデミー生はショートパンツやTシャツ姿だけどステージでは正装。見違えてしまって、「ガンバって！」と応援していました。

練習に明け暮れる毎日だからツアーや夕食招待を喜んでくれましたね。「楽しかった、ありがとう」と報告を受ける私たちも幸せでした。本当に、応募が多くて公平に抽選するのが大変でしたね。

慌てたのは当日キャンセル。汗だくで対応しましたが関係者の協力もあってナントカ…。
夕食招待パトロン希望の声も聞こえてくるのですが、催行日時が間際に決まり多くの方に声をかけられない事情があって申し訳ないです。
来年にむけて改善したいことはたくさん！来年も頑張りたいで～す、みんなの喜ぶ顔が見たいから。

アートボランティアウィーク

札幌の文化に関わるボランティアをネットワークで繋いだ組織、V-net主催の「アートボランティアウィーク」が5月19日から25日まで札幌文化芸術交流センター（札幌市中央区北1西1）で催されました。同センターは、札幌市民の新しい文化の拠点として、４～８階はオペラ上演が可能な大劇場“hitaru”、１～2階には情報センターや図書館、人気カフェMorihikoプロデュースによるレストランや喫茶が昨年10月にオープンしたばかりです。

今回のイベントでは、１階のSCARTSモールと呼ばれるオープンスペースでの展示とSCARTSコートと呼ばれるクローズされたスペースで開催されました。「PMFを応援する会」は25日に展示と「カフェサロン」の特別編コンサートを開催して大きな反響をいただきました。

Ⅰ 展示 【SCARTS モール　10:00～20:00】

「PMFを応援する会」創成期の新聞記事や写真、アカデミー生との交流写真などを掲示し、活動を知っていただく貴重な機会となりました。
会場で流していた第一回PMFのDVDに引き込まれるように多くの方が立ち寄り、バーンスタインのパワーが伝わった気持ちでした。
また、PMFへの思いをポストイットに書いてもらい、メッセージツリーに貼ってもらうと「楽しみにしています」、「ありがとう」、「行ってみたいです」の言葉でいっぱいになりました。これからも市民とPMFをつなぐ活動を大切にしていきたいと思います。

Ⅱ カフェサロン#29 【SCARTSコート　18:00～21:00】

PMFへの理解のために、その都度テーマを決めて開催してきた「カフェサロン」の特別編コンサートを企画しました。札響コンサートマスター大平まゆみさんとサキソフォン奏者の田野城寿男さん、札響パーカッション奏者大家和樹さん、さらにオーロラメッセンジャーの谷垣哲也さんとのコラボコンサートです。ここでは視覚や聴覚など五感に訴える新しい試みを体感し、つづいた交流会では場の雰囲気をガラッと変えるテーブルコーディネーターの演出もあって、冷たい飲み物や軽食、そしてトークが混然となってカフェサロンの総仕上げとなりました。演奏者も聴衆も、そこにいたみんなで作り上げた時間、空間でした。まだまだ発展途上のカフェサロン、経験を糧に成長していきたいです！

フェローミーティング　2019年7月5日　【ホテルMプレミア　17:00-18:30】

応援する会に関する活動、あるいはPMFをめぐるボランティア活動に関して提言をいただくミーティングを行い、それぞれの専門的な視点による的確なご意見を頂戴しました。

また、今回は藤女子大学の学生２人と担当教授にオブザーバーとして参加いただき、これまでホルンやトランペット、ピアノに親しんだ経験や大学で学んでいることを踏まえて、PMFの印象やボランティア活動に対する気持ちなどをお話いただきました。若い世代の持つ前向きで積極的な姿勢に、私たちもたくさん学ぶところがありました。

丹羽新会長の紹介も交え、PMF30回の感慨を共にし、これからの新しい展開に向けて気持ちを新たにしたミーティングでした。

PMFを応援する会　組織体制に関するアンケート
結　果　の　ご　報　告

この度、日頃から募金のご協力をいただいている皆様を中心にＰＭＦやＰＭＦを応援する会に対するご意見などを伺ったところ下記のとおりご回答をいただきました。
ご協力いただきました皆様には厚くお礼申し上げます。

●アンケート実施　２０１９年５月13日～８月31日
回答　５通 / ７５０通配布

●アンケート結果（複数回答あり）

Ｑ１　通常、どのタイミングで寄付をいただいていますか？

●協奏を見て　３件　●決めていない　２件

Ｑ２　新しい応援する会の事業「テーブルオーナー」や「出前コンサー」トに参加してみたいですか？

●企画の情報を知りたい　３件　●加齢、病弱のため不可能　１件　●無回答　１件

Ｑ３　ＰＭＦのコンサートはどのくらい聴きに行きますか？

●１～３回　３件　●５回以上　１件　●行けない　１件

Ｑ４　ＰＭＦに対して、要望を言えると感じていますか？

●ＰＭＦのウエブサイトで常時意見を受け付けるべき　１件
●旭川でもコンサートを開いてほしい　１件　●特にない・無回答　３件

Ｑ５　会員になればＰＭＦへの関わりが増えると思いますか？

●情報が増えるかもしれない　１件　●変わらない・無回答　４件

Ｑ６　ＰＭＦに対して望むものは何ですか？

●若手音楽家の教育、札幌の芸術文化向上　４件　●北海道全体の芸術文化の向上　１件
●札幌の観光商業への好影響　２件　●ＰＭＦ生の食事のビュッフェ形式の提供　１件

Ｑ７　応援する会の組織体制は現行と会員制度への移行とどちらが望ましいですか？

●現状のままでいい４件
●その他（ゆるやかなところがいい）１件　●無回答　１件

●まとめ

全体を見回しますと、メッセージ欄に「『応援する会』はあくまで『応援』であって会員制度のような明確な組織化を図ることに違和感を覚えます。緩やかな連帯に居心地の良さがあると思います」という意見があったように、特に「ＰＭＦを応援する会」に大きな変化を求めているわけではなく、改めて会員制度にする必要性は今はないものと判断されます。

しかし、高齢化や引越など、置かれている環境の変化等により、募金額も減少傾向にあり、新たな支援層の開拓の必要性を痛感します。また、会として実施する事業の周知についても改善の余地があるものと思われます。これまでご支援いただいている皆様には、引き続きご協力とご理解をお願いいたします。

文責：PMF を応援する会、事務局長　近藤　崇

新会長就任のお知らせ

このたび、当会会長に丹羽祐而氏が就任いたしましたのでご紹介させていただきます。

丹羽祐而新会長

丹羽祐而（にわ ゆうじ）氏は、現在ビジネスコンサルタント会社を経営するかたわら、石狩新港の浜辺をきれいにする活動や自然保護活動、環境保全活動を積極的に推進され、かつては札幌市教育委員長を歴任されるなど、教育、文化活動に深く関心を持たれている方です。

これから、ますますPMFの認知度の向上、一層の市民参加の方向を促進するために丹羽会長とともに役員一同邁進していく所存です。

なお、会長代行を務めておりました鈴木敏明氏は、より大きな理想に向けて飛び立って参りました。

鈴木氏から皆様へ宜しくお伝えくださいと託っております、「本当にありがとうございました」。

今後におきましても、変わりませぬご理解、ご協力をお願い申し上げ、新会長就任のご報告とさせていただきます。

PMFを応援する会（Pacific Music Festival Supporters Association）は
PMFへの募金を呼びかけ、PMFとの架け橋となり、応援の輪を広げていこうと
２００９年に発足しPMFを応援する活動を続けて参りました
これまでの組織委員会への寄付総額も5,625,000円となりました
「寄付の文化」が札幌に根付くことを願い
ＰＭＦ国際教育音楽祭を市民の力で支えていきたいと思います

お詫びいたします

平成３０年度募金報告を、協奏20号にて掲載いたしましたが、河島瑛子様のお名前が記載されておりませんでした。心よりお詫び申し上げます。

＊尚、2019年度（2019年4月1日～ 2020年3月31日）の募金報告は2020年4月以降の協奏にて掲載する予定です。

「協奏」は皆さまの募金で作られています。
ご支援に感謝申し上げます。

【発　行】
ＰＭＦを応援する会
〒064-0913　札幌市中央区南13条西5丁目1-1-203　近藤方
FAX専用：011-301-3851
ホームページ　http：//pmf-support.main.jp/
（印刷協力　株式会社マルシン）

【編集後記】

実りの秋到来。30回という大役を終えたPMFの中にも実りの秋を感じながら編集をしていました。
私事ですが昨秋、地震後に32時間余りの停電を経験しました。非常事態でもテキパキと冷静なつもりでしたが、通電後には安堵感で力が抜けるような気持ちになりました。思いの外、緊張していたようです。
被害に遭われた皆さまに早く日常が戻りますようお祈りしています。（あ）